

小 論 文

次の文章を読み、あとの設問に答えなさい。

子どもたちのまわりには、テレビの音、保育室の騒音（テープレコーダーをしかけてみると、保育所や幼稚園のうるさいこと、聞きたい声が少しも入らず、騒がしい音ばかりということはありませんか）、おとなのイライラからくる不快なことばなど、耳をふさぎたくなる音が多すぎて、「快く聞く」という経験が少なすぎるような気がします。ことに、子どもたちと直接触れあう母親や保育者の日常生活のことばは、「早くしなさい」「だめですよ」「いけません」といった指示語、否定語、禁止語が圧倒的に多く、子どもたちは、ことばへの信頼を失いかけているのではないかと憂えるのです。それが「人の話しが聞けない子どもたち」というレッテルを貼られる結果になっているように思います。

さまざまな騒音の中から、子どもたちが自分の力で、人のことばを聞くという力を得ることが重要になってきます。が、まずはまわりの環境を改善していく必要があります。日々の生活の中で、常に騒音が聞こえている状態を改め、静かな場所や時を設けることに心がけること、たとえば、家庭ではテレビのつけっぱなしはないか？家庭訪問やクラス懇談会の折に話し合ってみることが先決です。園内の何カ所かに、常時静けさをたもてる部屋（コーナー）をつくること、それでなくても極力、騒音の少ない自然の中に子どもたちを連れ出し、自然界のさまざまな音、（風、草や葉、鳥の声など）に関心をもたせ、耳をすまして聞く体験をさせたいものです。そして、騒音の時代だからこそ、人間のことばは、快いものだという、ことばへの信頼を育まなければなりません。

子どもたちにとって快いと感じることばは、おとなから一方的に浴びせかけられるものではなく、子どもたち自らが発見したり、喜んだり悲しんだり、心を動かしている事柄に対してことばが添えられることではないでしょうか。

「ことばは心のつかい」だといわれます。そういう意味でもことばは、「○○というのよ、言ってごらんなさい」と強いるものでも、教えられるものでもありません。子どもたちの心が育っていけば、ことばも育つのです。

最近の子どもたちの、ことばの遅れの原因として考えられるおとなの話し方の好ましくない例として、「無口」「早口」「ことばの先取り」があげられています。子どもたちの心の中にストンと入りこみ、そこから生きたことばを生み出させるおとなの好ましいことばは、まさに「子どもの心の動きに添った共感のことば」だと思っています。

（今井和子『子どもとことばの世界-実践から捉えた乳幼児のことばと自我の育ち』
ミネルヴァ書房（1996）pp. 213-214 より引用）

設問1. 本文の内容を300字程度に要約しなさい。

設問2. 本文に対するあなたの考えを自身の経験または想定した事例をふまえて500字程度で述べなさい。